令和元年度

研究紀要

第 24 号

秋田県立男鹿工業高等学校

目　　次

◆巻　頭　言

「学びのエキスパート」育成のために　～まずは学習観の転換から～　1

校長　今川　拡　･･････････････

◆今年度の研修概要　･････ ･･･　2

◆令和元年度　特別支援教育に関する研修会と研修会後のアンケート　･････････････････････　3

◆校内研究授業Ⅰ

研究授業概要　･･･　6

国語科　（授業者　永井しおり）　･･････････････････････････････････････　7

地歴公民科　（授業者　腰山みゆき）　･･････････････････････････････････････　11

◆校内研究授業Ⅱ

研究授業概要　･･･　14

英語科　（授業者　齊藤さつき）　･･････････････････････････････････････　15

保健体育科　（授業者　渡部　祐司）　･･････････････････････････････････････　18

設備システム科　（授業者　佐々木康宏）　･･････････････････････････････････････　22

◆令和元年度　中堅教諭等資質向上研修報告　　教諭　渡部　祐司　････････････････････　25

◆令和元年度全国設備工業教育研究会第55回秋田県大会報告

保坂　悟　･･･････････････　31

◆編 集 後 記　･･　34

「学びのエキスパート」育成のために　～まずは学習観の転換から～

校長　今　川　　拡

授業中の男工生に関して、「安易に解答を欲しがる」傾向があると、しばしば耳にします。教科書に記載されていたり、既習事項としてノートに書かれていたりする解法や説明に基づいて、「答えを導き出す」という過程が軽視されているような気がしてなりません。

教育心理学を専門とする東京大学の市川伸一教授の指摘によれば、成果の上がらない学習観を整理すると、次のようになります。「勉強はしょせん暗記だ（**暗記主義**）」「答えが合っていればいいや（**結果主義**）」「とにかく頑張るしかない（**物量主義**）」の３つです。小学校で成績が良かったのに中高で途端に成績が下がる生徒は、こうした学習観に陥っている可能性があるというのです。これに対し、本当に成績のいい生徒は学習自体を楽しんでいます。彼らに成果をもたらすもの、それが次に示す４つの望ましい学習観です。

＜望ましい学習観＞

1　**意味理解志向**：理解しておぼえる　⟷　暗記主義
2　**過程重視**：考える過程が大切　⟷　結果主義
3　**方略志向**：やり方を工夫する　⟷　物量主義
4　**失敗活用**：失敗から学ぶ　⟷　結果主義

さて、今年度、本校の授業改善のキーワードとして、「ユニバーサルデザインの視点からの授業づくり」を掲げました。その取組の実際は本編に譲るとして、ここでは「**学びのユニバーサルデザイン**（以下、ＵＤＬ）」について言及したいと思います。ＵＤＬとは、すべての子どもが学べるように、授業を設計するための理論的な枠組みのことです。「取組」「提示（理解）」「行動と表出」の三原則の下、障害の有無にかかわらず、すべての子どもの学習の伸びを助け、子どもたち自身が**「学びのエキスパート」**になれるよう支援することが目的です。もし、授業に参加できない生徒がいたとすれば、カリキュラムの方に障害があると考えます。目標の明確化を最も重要なものとして位置づけた上で、学習のゴールに到達するために、学習者自身が自分に合う学び方を選択できるという発想です。

例えば、板書を書き写すのに時間がかかる生徒がいるとします。「写す時間を十分に確保する」のが一般的な対応です。それでも間に合わない生徒には、「補助プリントを準備する」、あるいは「スマホで撮影する」という手段も考えられます。この３つをオプションとして一度に提示し、生徒自身に選択させるのがＵＤＬです。さらに、早く書き写し終えてしまい、暇をもてあます者がいるとすれば、そうした生徒はその間、「発展的な課題に取り組む」のです。協同学習であれば、人と話すのが苦手な生徒には話す以外の方法を、一人で考えたい生徒には一人でもよい学習環境を設定することになります。

教育でもエビデンスが問われる昨今、ＵＤＬが脳科学、心理学や教育学等の豊富な研究知見を基盤に開発されていることも心強いところです。もっとも、教師のマインドセットを**「どう教えるか」から「（学習者が）どう学ぶか」へ**と転換させること自体が、ＵＤＬの起点であると同時に、最もハードルが高いところかもしれませんが…。

結びに、寄稿してくださった方々、並びに編集に携わってくださった研修部の皆さんに感謝するとともに、この紀要に所収された実践の成果が、今後の本校の教育活動の中に根付き、活用されていくことを願うばかりです。

※学習観やＵＤＬに関する記述は、月刊誌『指導と評価』（図書文化社）2018 年６月号及び 2020 年２月号の内容に基づくものです。

◆今年度の研修概要

	研修項目	実　施　日	場　所	関係する分掌
1	中学校訪問 ・男鹿東中学校	７月１０日（水）	保健体育、数学	２名参加
2	救急救命講習会	７月２４日（水）	視聴覚室	養護教諭、研修部
3	特別支援教育研修会	９月３０日(月)	会議室	研修部 特別支援教育委員会
4	指導主事等学校訪問に伴う 校内研究授業Ⅰ 国語科 地歴公民科	１０月１７日（木）	 Ｅ１教室 Ｍ３教室	教務部、研修部 永井しおり 腰山みゆき
5	校内研究授業Ⅱ 保健体育科 英語科 設備システム科	１１月１９日（火）	 第一体育館 Ｅ１教室 Ｆ２教室	研修部 渡部祐司 齊藤さつき 佐々木康宏
6	中堅教諭等資質向上研修報告会	２月２０日（木）	研究紀要にて報告	保健体育科教諭 渡部祐司

令和元年度特別支援教育に関する研修会と研修後のアンケートについて

男鹿工業高等学校
研修部・特別支援教育委員会

１　目　的　　平成１９年の学校教育法一部改正により、特別支援教育が全ての学校においても実施されることとなり、高等学校においても特別支援教育の推進が図られている。発達障害などの困り感を抱えた生徒への対応やユニバーサルデザインに基づいた授業づくりについて学び、特別支援に関する専門性の向上を図る。

２　日　時　　令和元年９月３０日（月）　１５時１５分～１６時１５分

３　会　場　　男鹿工業高等学校　会議室

４　参加者　　本校職員及び参加を希望する近隣高校の職員

5　当日の流れ

14:30~　　天王みどり学園　新目、遠藤着
15:00~　15:15　受付（担当　みどり学園　遠藤）
15:15~　15:20　開会（司会：　永井　しおり）
挨拶　男鹿工業高校　校長　今川　拡

15:20~　16:05　講演
演題「特別支援教育の視点を生かした生徒理解とユニバーサルデザインに基づいた授業づくり」
講師　天王みどり学園　　教諭（兼）教育専門監　　新目　敏子

16:05~16:10　質疑応答
16:10~　　閉会　　（アンケート回収）　　解散

研修後のアンケートについて

◎ 研修内容について

・小中に比べ授業のあり方は考えて行くべきだと思う。これを機に今年１つだけでも取り入れ、授業改善につなげたい。
・UD について大変分かりやすい内容で参考になりました。ただ、駆け足だったことは否めないので、毎年テーマを設けて焦点化できれば、さらに効果的になると思います。
・「生徒同士が互いに認め合う」＝伸びる集団は関係性もよい。生徒指導にもつながります。
・もう少し詳しく高校レベルですぐに実践できる内容を設けていただけるとうれしい。次回は、実践例だけでも時間をある程度とっていただきたい。
・授業中、説明後に分からないといった言葉をよく聞く。ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりの必要性を実感した。大変勉強になりました。ありがとうございました。
・生徒個々の対応で違ってくるとは思いますが、他校の実践例などを伺いたかった。
・１時間弱の研修ということだったが、もう少し時間をかけた研修が必要だと感じる。内容が濃密だった。ありがとうございました。
・発達障害の生徒はもちろん、障害に分類される人が増えている現代社会での、私たちの立ち位置はこれまで以上に難しくなると観じている。日常生活や普段の言動でもＵＤの考え方を気にしてはいるものの、改めてＵＤの考え方の重要性を感じた。
・特別支援教育コーディネーターの研修等でも学んだことのある内容もありましたが、忙しさの中で後回しにしてしまうこともあり、日頃から意識して生徒とのコミュニケーションや指導にあたることが大切であると実感しました。
・分かりやすく説明していただき、まさにＵＤの考え方をベースにされた講話でした。今後の授業づくり、クラス作りに生かしていきたいと思います。
・既知の内容もあったが、実践例の提示が何点かあり、参考になった。
・自分が進めている授業のあり方について考え直し・見直す絶好の機会となりました。
・ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりをもっとゆっくり聞きたかった。資料ｐ１９～のところでは具体的な（ビジュアル）ものがもっと多いとよかった。
・今回研修で学んだことを生かして指導していきたい。
・具体的な例などもあって分かりやすかった。
・ＵＤとは何かが理解できた。全て実践するのは難しいが、できるところから工夫してみようと思う。（すでにやっていることでも当てはまる事が多かった。）
・分かりやすく説明していただいてよかったと思う。
・内容は適切ですが項目が多くしぼって欲しかった。
・愛着障害についてよくわかり参考となった。
・安心できる学級づくりから一度見直したいと思いました。個別的な対応ではなく「全員への多様な対応」が大事であるというのが印象的でした。
・ユニバーサルデザイン、インクルーシブ教育の考え方について理解することができ、授業で少しずつ実践してみたいと思いました。今後はこのような生徒理解はますます必要になってくると思います。
・非常によかったと思います。参考になりました。

・本校の生徒への対応や通常の授業にも通じる内容で参考になった。インクルーシブ教育システムについては、今後さらに勉強が必要になると観じた。
・本校にとても参考になる内容でした。ＨＲや授業ですぐに活用できそうです。ありがとうございました。
・本校においても特別支援を必要とする生徒が見られる。今回の研修で新たな障害について知ることができた。今後は、養護教諭をはじめ関係職員と話題にしていきたい。
・発達障害やユニバーサルデザインについて広く確認できた。大変よい勉強になりました。
・タイムリーで分かりやすかったです。

◎ 今後の要望など
・具体的な生徒への言葉かけなど、ほめるといってもどのようにほめればよいのか悩む場面がある。（ほめるとつけあがるようなので）
・スモールステップで、回数を重ねて積み上げていくことができれば、職員により浸透して成果につながると思います。
・特別支援の視点を生かした具体的な各教科での実践例を知りたい。
・実践的な内容を臨む。
・高校生向け（道徳・保健）とからめての講話などがありますか？
・問題が生じた時、是非相談に乗っていただければと思います。ありがとうございました。
・具体例があったのですが、もっと時間をかけて聞きたいと思いました。今後は、限られた時間だと思いますので、パワーポイントのデータを学校にいただければありがたいです。
・教員個々の理解や対応だけでなく、組織的に支援する手立てを知りたい。
・雑事にまぎれ、授業の構築にあまり気を向けていなかったように思います。参考にさせていただきます。ありがとうございました。
・多様性を一つにまとめて行う授業方法の具体例を教えていただければと思います。
・年一回、できれば一学期前半に設定していただければ、ＨＲや授業に活用できるかな、と思います。
・丁寧な説明であり、わかりやすい研修でした。ありがとうございました。

令和元年度　校内研究授業Ⅰ

令和元年度　校内研究授業計画

１　　テーマ　　「学びに向かう姿勢を育む授業づくり」

２　　担当教科・担当者

国語科　　永井　しおり

地歴公民科（世界史Ａ）　　腰山　みゆき

３　　研究授業日時　　１０月１７日（木）６校時

４　　クラス・授業内容

国語科　　電気電子科１年　「木曽の最期」平家物語

地歴科　　機械科３年　　「第二次世界大戦Ⅱ」

５　　協議会の開催

国語科学習指導案

日　　時：令和元年１０月１７日(木)６校時
ク　ラ　ス：電気電子科１年
（使用教室：Ｅ１教室）
使用教科書：新編　国語総合（数研出版）
副　教　材：最新国語便覧（浜島書店）
指　導　者：永井　しおり

１　単元名　　登場人物の生き方について考えを伝えよう

２　単元の目標
・場面の展開に留意して、登場人物の心情や考え方を捉えようとする。（関心・意欲・態度）
・場面の展開に留意して、登場人物の心情や考え方を捉える。（読む能力）
・古典を読むのに必要な語句の意味や用法を的確に理解する（知識・理解）

３　取り上げる言語活動と教材
言語活動：音読を通して、登場人物の心情や考え方について自分の考えを深め合う。
教　　材：「木曽の最期」平家物語（『新編　国語総合』数研出版）

４　具体的な評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
・場面の変化に留意しながら読み進め、登場人物の心情がどのように表現されているかを考察しようとしている。	・場面の変化に留意しながら読み進め、登場人物の心情がどのように表現されているかを考察している。	・軍記物語における音便や対句の持つ効果、当時の武士の価値観について理解している。

５　生徒と単元
男子２１名　女子５名の計２６名のクラス。高校に入学して古典作品（古文）としてはまだ２作品目で、音読に慣れてきたとは言い難い。しかし、本校のカリキュラム上、古典に触れるのは１年次のみなため、できるだけ古典の世界に興味を持たせる工夫をしてきた。１年生３クラスの中では比較的音読に積極的で、知的好奇心も強い生徒が在籍している。反面、理解の程度に個人差が大きく、特に読むことになると活動を放棄してしまう生徒もいる。
この教材の魅力を最大限生かして、古典作品に少しでも関心を持って欲しいと考えている。さらに、教科書場面では主従の対比的な人物像が描かれており、生き方を考えさせるのにも適材であると考える。他の人の考え方に関心を寄せ、さらに自分の考え方を深めさせるようにしたい。

６　指導計画
1　平家物語の特徴について　…１時間
2　本文読解のための導入、　音読・表現方法の理解　…１時間（本時）

3　教科書本文の読解、　音読・口語訳　…３時間
4　登場人物の生き方について、　考察・発表　…２時間
計　７時間

7　本時の計画（本時　　２／７時間）

（１）本時の目標

リズム感を意識して音読しよう。　（読む能力）

（２）学習過程

過 程	生徒の学習活動	教師の支援	評価規準　（評価方法）
導 入 （5 分）	1　前時の振り返り。	黒板に貼った絵 漫画）で確認させる。	
展 開 （40 分）	2　本時の目標を確認する。 リズム感を意識して音読しよう。 3　学習課題を確認する。 班ごとに一人ずつ音読し各自評価する。 一番評価の高かった者を選出する。 4　各般から代表者が発表する。（１班から５班） 発問　なぜ、評価される　読み方になったのか？ 5　班で話し合わせる 6　発　表　（挙手）	・教師が範読する。 ・各自、場面に適した読み方になるよう考える時間を確保する。 ・各自メモ（付箋）をとること、次の人に移る前に時間を確保するよう指示する。 ・「いいね」を促す。 ・付箋の貼り付けと代表者の選出方法を指示する。 ・どこを評価されたか述べさせる。 ・黒板に明記する。 ・スピード感や臨場感のある場面である点を助言する。 ・音便がスピード感につながっていることに気づけたか、適宜板書で示す。 ・音便やオノマトペが現代語に通じていることを確認させる。	リズム感のある音読ができていたか、相互の評価を通して確認する。 （読む能力）
まとめ （5 分）	7　本時の学習を振り返る。	・導入部で扱った内容がここで確認できるよう時間に配慮する。	

令和元年度　校内研究授業　　テーマ「学びに向かう姿勢を育む授業づくり」

国語科研究協議会

【日時】　令和元年 10 月 17 日(木)１５：３０～１６：１５（４５分）
【教科／科目】　国語／国語総合
【クラス】　電気電子科１年（２６名）
【授業者】　永井しおり
【司会者】　鈴木恵一　　【記録者】　髙田香織
【授業参観者】保坂悟、長谷部正則、猿田英幸、近藤周平、成田実、畠山武見、千田義人、土居耕太郎
近藤健悦、池田雅之、佐々木康宏

【協議会参加者】

１．授業者より

古典は一年生だけの勉強なので、意欲を持たせ読みに重点を持たせ魅力的な教材を選んだ。音読で一番重視してほしかったスピード感を感じてもらえてよかった。

２．参観者より

・普段からの雰囲気作りができている。
・留学生→漫画のオノマトペ→臨場感→本文の音読の流れがよかった。
・黒板を見ると流れが一目で分かり、ユニバーサルデザインができていた。
・親しみを持って、雰囲気よく授業されていた。生徒が楽しく音読をしていた。互いに相手のよい点をほめる評価をしていた。
・机の配置が工夫されており、先生が話をするときは先生の方を向くことができていた。付箋を貼るシート等があればよかった。
・互いの生徒のよい所を探すところがよかった。グループ全員が授業参加できていてよかった。
・洗練された授業であった。班の話し合い内容をまとめる時間があればよかった。
・楽しい授業であった。普段クラスで話し合いをしない生徒が音読をしていて印象的であった。
・ねらいに基づいた授業展開がされていた。
・普段物静かで発言しない生徒も笑いながら明るく参加していた。授業の目標が達成されていた。
・黒板が見やすく、わかりやすかった。声のリズムが役者のようによかった。わからない内容もわかった気になった。
・向かっていく、楽しい授業に感心した。本校生にとって、題材や目標などすべてがわかりやすかった。やった感、達成感、できた感を満たしてあげることが大切であると感じた。
・入りが漫画だったので興味を引いた。意見の言えない生徒も付箋の活用等で参加できた。普段からの雰囲気作りができている。
・生徒が楽しく授業を受けていた。しおり先生も楽しく授業されていた。昨年と比べて先生方の熱意が生徒に伝わり以前よりも授業ができてきているのではないか。付箋の扱いが慣れていたので、中学でもやってきたのではないか。教員の意識改革が必要である。
・しおり先生が黒子に徹していた。評価を生徒同士がしていてうれしい、楽しいと感じながら授業を受けていた。机の配置等を改善すればもっと盛り上がる授業ができると感じた。音読で盛り上げるのは難しい。

３．指導主事（櫻田先生）より

よかった三点

・一ヶ月前課題を意識された授業であった。リズム感、発問、ユニバーサルデザイン、振り返りなども一ヶ月前課題が意識されていた。

・音読で盛り上げるのは難しいが、内容を理解するための音読がよくできていた。また、次の段階の内容を理解するに繋がるユニバーサルデザインのスモールステップができていた。

・工夫を凝らしたやる気を出させる授業であった。いいねを促し、付箋や漫画を使い楽しく授業する工夫がされていた。

もっとよくするための三点

・何度も読ませることで生徒が飽きるので、範囲を区切り班ごとに音読をさせてもよかった。（生徒の持続力を維持するのは難しいこと。）

・生徒間で口頭の評価で終わってしまったので、黒板に書き示すことが必要だったのではないか。

・題材が語り、口伝えの文学であるのでそのことを生徒に伝えた上で音読をさせればよかったのではないか。

・また導入の読みと内容理解後の読みの二つを比較し変容をみることも大事ではないか。

地歴公民科（科目名：世界史Ａ）学習指導案

日　　時：　令和元年１０月１７日(木) ６校時
ク　ラ　ス：　機械科３年（使用教室：Ｍ３教室）
使用教科書　：　改訂版　世界の歴史（山川出版社）
副　教　材　：　プロムナード世界史（浜島書店）
指　導　者：　腰山みゆき

１　単元名　　二つの大戦　　第二次世界大戦Ⅱ

２　単元の指導目標

二つの大戦を中心に、大戦の原因・性格・戦後の国際秩序、世界恐慌の影響、ファシズムの台頭、日本の動向などを理解させ、19 世紀後半から 20 世紀前半までの世界情勢と平和の意義を考察させる。

３　単元と生徒

男子３２名、女子３名の計３５名のクラスである。この単元は、生徒がよく知っている人物や絵画が登場することから、興味・関心を抱いているところである。しかし、時代背景や因果関係など筋道を立てて学習することに対しては意欲が低下してしまう。いかに興味・関心を持たせながら授業を展開するかが課題である。

授業では、発問に対してつぶやきで応じる生徒がおり、その生徒のつぶやきを活かしたい。一方で、生徒の多くは、自分の考えを発表することにやや消極的で受け身の姿勢である。また、指示に対して次の活動に移ることに多少時間がかかる。具体的な指示を出すこと、エピソードや作業等も取り入れて、集中力を維持できるよう声掛けが課題である。

４　指導の計画と評価

（１）指導計画

1	第一次世界大戦	…１時間
2	ロシア革命	…２時間
3	ヴェルサイユ体制とワシントン体制	…２時間
4	アジア諸地域の抵抗と独立、民族運動	…１時間
5	世界恐慌	…１時間
6	ファシズムの台頭	…２時間
7	第二次世界大戦前夜の世界	…２時間
8	第二次世界大戦Ⅰ	…２時間
9	満州事変と日中戦争	…１時間
10	第二次世界大戦Ⅱ	…３時間（本時２時間目）　計　１７時間

（２）評価規準

①関心・意欲・態度…本時の目標の意味を理解して、積極的に授業に取り組もうとしている。
②思考・判断・表現…日米の対立要素をグラフや地図を根拠に考察することができる。

③資料活用の技能　…グラフや地図の読み取りをとおして、根拠を基に追究する技能を身に付ける。
④知識・理解　　…日米の対立を理解している。

5　本時の計画

（1）本時の目標…グラフを読み取って、日米の対立要素を考察することを通し、自分の言葉で根拠を基に表現する力を養う。

（2）授業展開計画

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点・方法
導入 5 分	前事までの内容を確認し、本時の目標を確認する。	満州国成立と日中戦争など日本の中国進出について確認させる。	【①】
	本時の目標：日本はなぜアメリカとの戦争を始めたのか。		
	発問１　　グラフから日中米の関係を読み取ろう。		
	日中戦争の長期化と日中米の関係について ・円グラフ（「日本の軍需物資国別輸入額」）を読み取る。データから読み取れることをペアで話し合い、指名して発表する。	３つの円グラフの読み取りの手順（３段階）を説明する。 ・データの把握 ・データから分かる日米の関係 ・外国依存で日中戦争を継続していたことに気付かせる。	グラフを読み取り、日中戦争と関連づけることができる。【②③】
	・日米関係悪化について理解する。	・英米の中国支援に触れ、中国をめぐる日米の関係悪化に気付かせる。 ・日独伊三国同盟がなぜ日米の関係悪化につながったかを考えさせる。 ・日ソ中立条約に触れ関係悪化に気付かせる。	既習事項（ノート確認）と結びつけて考えようとしている。【①】
	・棒グラフ（「日本の原油輸入額」）から日米関係の悪化を読み取る。	・棒グラフの 1937 年から 41 年の時期に注目させて、日米関係の悪化に気付かせる。 ・米に代わる資源確保先に東南アジア進出が米の石油禁輸に影響したことに気付かせる。	グラフから、日米関係の悪化を読み取ることができる。【②】

	発問２　地図から日本の東南アジア進出と日米の対立を読み取ろう。		
	日本の東南アジア進出と日米対立について ・日本の進出目的が「大東亜共栄圏」の名の下に資源確保であることを理解する。 ・地図から日本の進出が植民地所有国と対立が生じたことを各自読み取り、指名により発表する。	・地図より植民地所有国を確認させる。	地図から対立を読み取ることができる。 【②③】
	本時の内容を確認する。	黒板に集中させて本時の内容（中国市場と資源確保のための東南アジア進出が日米対立となり、戦争になった）ことを確認させる。	

（３）目指す生徒の姿

グラフや地図に向き合って、意欲的に日米の対立原因を読み取ろうとしている。そして、グラフや地図から根拠を基にまとめようとしている。

令和元年度　校内研究授業Ⅱ

令和元年度　校内研究授業計画

１　テーマ　「学びに向かう姿勢を育む授業づくり」

２　担当教科・担当者

英語科	齊藤　さつき
保健体育科（体育）	渡部　祐司
設備システム科	佐々木康宏

３　研究授業日時　１１月１９日（火）６校時

４　クラス・授業内容

英語科	電気電子科１年	「Lesson 7 Living on Ice」
保健体育科	電気電子科２年	「球技　ネット型　バレーボール」
設備システム科	設備システム科２年	「生産システム技術」

５　協議会の開催

英語科（コミュニケーション英語Ⅰ）学習指導案

日　　時：令和元年　１１月１９日（火）６校時
ク　ラ　ス：電気電子科１年（使用教室：Ｅ１）
使用教科書：All Aboard! English Communication Ⅰ（東京書籍）
指　導　者：齊 藤　さつき

1　単　　元　　名　Lesson 7　Living on Ice

2　単元の指導目標　（１）コウテイペンギンの生活についての英文を理解し、環境を守るためにできることについて考える。
（２）現在完了形について理解し、表現できる。

3　単元と生徒　男子２１名 、女子５名のクラスである。英語学習に苦手意識を持つ生徒が数名いるものの、全体として落ち着いて前向きに学習に取り組む姿勢がある。工業高校の生徒としてものづくりの視点と本課の題材とをリンクさせた授業を試みたい。

4　指導の計画と評価
（１）指導計画　Lesson 7　･･･６時間（本時３／６）
（２）評価規準
A　関心・意欲・態度　･･･　ペアワークやグループ活動に積極的に取り組んでいるか。
B　思考・判断　･･･　英語の質問を理解したり、英語で答えたりできるか。
C　技能・表現　･･･　本課の題材や言語材料について、表現することができるか。
D　知識・理解　･･･　英文を読み理解し、必要な情報を得ることができるか。

5　本時の計画
（１）本時の目標
①本文の内容について理解を深め定着を図る。
②英語の指示や説明にしたがって、プロセスを理解し、行動することを楽しむことができる。
（折り紙ペンギンの作成）

（2）授業展開計画

	学習内容・活動	指導上の留意点	評価規準	観点
導入 (10)	・質問に答えながら、単元の題材、既習単語について定着をはかる。	・身近な話題から本時への話題へと導入し、本時の課題を提示する。	・主体的に取り組んでいるか。 ・質問に答えることができるか。	A B
展開 (30)	・語句を確認する。 （配付プリント） ・指示文を確認する。 （配付プリント） ・指示に従って、ペンギンを作成する。	・活動について説明する。 ・指示文を理解させる。 ・生徒の主体的な活動を促し説明しすぎない。	・全員が協力しながら主体的に作業を進めているか。 ・プロセスを大切にしているか。	D C
整理 (10)	・ペンギンの生活と環境問題のつながりを考える。	・本時の振り返りと次時への指示をする。	・生徒が作成したペンギンを活用する。	B

令和元年度　校内研究授業

研究協議会記録（英語科）

◎日　時　　令和元年１１月１９日（火）　６校時
◎科　目　　コミュニケーション英語Ⅰ（電気電子科１年）
◎授業者　　齊藤さつき
◎司　会　　奈良金市
◎記　録　　髙田香織
◎参観者　　船木和則、奈良金市、畠山武見、腰山みゆき、石井英樹、波多野大助
　　永井敦子、鈴木恵一
◎協議会

１　授業者から
プランで心掛けたことは，次の点である。
１．工業生としての授業を組み立てる。
２．不得意な生徒が多いので、全員が参加できる授業をする。
３．折り紙作りを通して教科書の復習をさせる。
４．ユニバーサルデザインを意識し、黒板には必要な物を選んで残す。

２　参観者の感想、意見等
・全員が授業に参加する工夫がされていた。本校では、興味関心をひかせ授業に参加する姿勢を作ってから授業に入ることが大切であるが、そこのポイントをしっかりと押さえた授業であった。
さらにシステムを生徒が理解していけば、もっと主体的、協働的な深い学びになる。
・全員が授業に参加しており、楽しく授業を受けていた。人数が少ないが、雰囲気が良かった。
生徒の心を掴むのが上手である。
・元気があり、失敗を恐れずに発言する生徒が多かった。授業の流れが出来ており、いろいろなものが盛り込まれていた。クラスの雰囲気が良かった。
・本時の内容に関連付けた導入が行われた。工業生に文系教科を教える難しさを感じた。
単語や使えるものを重視していた。
・苦手な生徒も積極的に楽しんでいた。ものづくりと英語をリンクさせていた。
・英文の折り紙の作り方の説明を読んで、難しい折り紙を折っていた。全ての単語が分からなくても雰囲気で分かった。生徒が手を動かし活躍できる場面があった。折り方の苦労した点などの説明もあればよかった。
・導入の大切さを感じた。折り紙が難しかったので折れるかなと思って見ていたが、ほとんどの生徒が出来ていた。作りっぱなしではなく、黒板に完成した折り紙を貼らせて、次の活動につなげていた。
また、生徒との関係作りの大切さを感じた。

保健体育科　学習指導案

日　時　：　令和元年 11 月 19 日（火）
場　所　：　男鹿工業高等学校　　第一体育館
対　象　：　男鹿工業高等学校　　２年電気科（32 名）
指導者　：　渡部　祐司

1　単元名　　球技　ネット型（バレーボール）

2　単元の目標

(1)　状況に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空間を作り出すなどの攻防を展開することができるようにする。【技能】

(2)　球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとすること、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。【関心・意欲・態度】

(3)　技術などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、協議会の仕方などを理解しチームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。【知識・思考・判断】

3　単元について

(1)　教材観

バレーボールはボールが空中に浮いているときだけがインプレーであり、ボールを床に落とさずに連続したコントロールが求められるところに技術的な難しさがあるため、長時間にわたって技術を習得する必要がある。また、互いをカバーしあいながらプレーが進められる運動であり、生徒同士の関わり方が意欲に大きく反映されるため、より良い人間関係を築くためにも役立つと考える。

(2)　指導観

ボールを床に落とさずに連続したコントロールをするためにも必要不可欠なのがオーバーハンドパスとアンダーハンドパスの習得である。パスの基本動作の習得とともに、それを生かした攻防の展開ができるようにさせる。また、お互いをカバーしあいながら進められるスポーツであるので、全員でボールをつなぐ一体感と楽しさを味わわせたい。

(3)　生徒観

男子 30 名と多いが、体を動かすことに対する意欲が高い生徒とそうでない生徒に二極化している。また、技能の習熟度にも差がある。

4　単元の評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
球技の楽しさや喜びを味わうことができるよう、フェアなプレイを大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保して、学習に自主的に取り組もうとしている。	生涯にわたって球技を豊かに実践するための自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	球技の特性に応じて、ゲームを展開するための作戦に応じた技能や仲間と連携した動きを身に付けている。	技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法、試合の行い方を理解している。

5　本時の計画　　球技「ネット型」（3/１０時間）

（1）　本時のねらい

３段攻撃ができるように工夫する。（３回で相手コートに返す。）【思考・判断】

（2）　展　開

段階	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 （ 10.分 ）	1　整列・挨拶・出席確認 ・準備体操	・整列の徹底、挨拶をしっかりさせる。	
	2　本時の説明とねらいの確認	・本時のねらいを理解させる。	
展開 （ 35 分 ）	3　二人一組でパス練習 （アンダーハンドパス、 オーバーハンドパス） 4　三人ゲーム （バドミントンとネットを 使って）	連続してできない時は、一回ずつやるように指示する。 ルールの確認 ・必ず３回で返す。 ・アタックは禁止。 ・６人チームで協力して落とさないで続ける。	【思考・判断】 自分の考えを発言したり、書き出したりしている。 （観察・ノート）
	＜発問＞　３回で返すためには、どうしたら上手くいくか？		
	5　ゲーム （バレーコートとネットを使って）	・ルールの確認…「必ず３回で返す」 ※技能の習熟度によって、「アタック」 を有りにする。	
整理 （ 5 分 ）	6　集合・整列 ・本時のまとめ ・学習シートへの記入	・すばやく集合、整列させる。 ・学習内容を振り返り、感想を記入する。	

令和元年度　校内研究授業

研究協議会記録（保健体育科）

◎日　時　　令和元年１１月１９日（火）６校時
◎科　目　　体育
◎授業者　　渡部　祐司
◎司　会　　近藤　周平
◎記　録　　土居耕太郎
◎参観者　　船木教頭　吉原　成田　高松　池田　千田　佐藤　鈴木　　近藤　山影　土居　徳重
◎協議会　　船木教頭　吉原　高松　池田　千田　　近藤　山影　土居　徳重

１　授業者から

三回で返すことを目標に、互いにパスを続けるいうこと意識させおこなわせた。生徒の技能段階の差もあり、うまくいかない場面もあった。何故３回で返すのかについての指導も不足していたと感じている。ねらいまでの生徒の技能段階に応じた手立てが必要であった。

２　参観者の意見

千田

体を動かすことが好きな生徒が多く、自主的に動こうとす場面が見られた。日頃の指導と生徒理解がなされていることを感じた。また時間をタイマーで区切りながら展開している場面を見て、実験等の授業で参考にしていきたいと思う。

吉原

座学では見ることのできないパワーを感じることができた。個々の個性を上手に掴んで動かしていた。自分１人ではできない、そのためのパスであることを指導し、１人ではできないことを他者に託すことを理解している動きであった。また時間で動く集団行動やメリハリが鍛えられていて、これが修学旅行にもいかせれると思う。

高松

授業時間前にコートの準備やウォーミングアップをおこなっていた。体育に向かう生徒の温度差が大きいかったが、熱量の大きい生徒を上手く活用していた。授業中盤での助言やアドバイスによって、パスが続くよいうになり、生徒の表情が明るく楽しそうであった（充実感・達成感）。最後のゲーム時はサーブを打たせるのではなく、ボールをほおってあげることで、本時の目標に上手く繋げられたのでは。

徳重

普段の生徒とは違いとてもやる気の感じられる姿を見られる授業でした。大人しい生徒にも元気な生徒が声を掛け、うまく混ざることができていた。女子が２名と少ない中、違和感なく入っていた。また、場面々での指示が的確で、メリハリがありよかった。

池田
段階的に生徒を動かし、最終的にゲームまで繋げられていた。地面にボールが落ちていたが、生徒自ら拾うなどの行動が見られ、安全に留意する意識が生徒に浸透していた。対人練習の際にはボールに触れる回数を増やす工夫がなされていて勉強になった。最後のゲームでは、サーブを打たせるのではなく、パスでコート内にボールを入れた方が段階的に練習してきた成果が出せたのではないか。

山影
バレーはクラスの雰囲気が大きく影響してくる種目である。技術的に難しい生徒もいるが、声を出し「３回で返すぞ」という意識が出ていたのが良かった。ボールの数が少なく対人パスができなかったのが残念である。ゲームの中で３回で返して得点すれば２点といった動機付けを入れることで、繋ぐことへの興味を持たせることができていた。技術的にはオーバーハンドを使う意識を持たせられれば展開も変わったきたのではないか。

土居
工夫するという部分で、３回で返しアタック無しというルールでしばり、動きの中で三段攻撃を体感させたり、どのようにすれば上手くいくのかについて、生徒との発問の中から課題や解決策を導き出すなど、今回のテーマでもある「学びに向かう姿勢を育む授業づくり」に即した授業展開だったと思う。

近藤
元気があってとても良かった。体育の観点から安全・運動量・生徒の動きの中で、最後のゲームでもう１面ネットを張ってもよかったのではないか。段階的に良い感じで展開できていたので１面のみでゲームをしてしまうことで運動量や生徒の動きが大幅に減ってしまっていた。最初のパス練習では、まだ技術的に対面では難しかったのではないか。またパス練習の際の生徒との発問の中で、気持ちが良い・コミュニケーション・声という発言があった。最後の三段攻撃が上手くいかなっかったゲームの中でも、生徒からの発言を促し、課題や解決策を導き出せればねらいとテーマに合致し学ぶ姿勢が次の段階に進んだのではないか。

教頭
なぜ上手くいかなかったのかを、生徒同士で話し合う場をも設けても良かったのではないか。それによってさまざまな解決策がうまれたのではないか。また、体力・技術・やる気等の部分での二極化を感じる。これは本校だけの問題でないと思いう。中堅研修を機会にこの差が少しでも無くなるような指導をしてもらいたいと思う。

設備システム科　「生産システム技術」学習指導案

日　時　：　令和元年11月19日（火）6校時
対　象　：　設備システム科2年生 30名
教科書　：　生産システム技術(実教出版)
場　所　：　設備システム科 2年教室

1　指導単元

第７章 生産管理　２節 生産管理　3.品質管理

2　単元目標

製造を効率的に行うための生産管理について理解する。

3　単元と生徒

１期　教材観

この単元では、製造業において工業製品を効率的に生産するための管理の手法について学ぶ。

１期　生徒観

男子 24 名、女子 6 名のクラスである。集中力は続かないが、問いかけに対しての反応が非常　に強いクラスである。

この単元を学ぶことにより、ただ製造するだけでなく、どのようにすれば効率的に行えるか、考えながらものづくりをする能力を育てたい。

１期　指導観

プレゼンテーションソフトを用いることで視覚的に訴え、印象に残るよう指導していきたい。

4　指導計画と評価規準

（１）指導計画(12 時間)

１節　生産管理のあらまし・・・・・・・・・・・・2 時間

２節　生産管理・・・・・・・・・・・・・10 時間(本時１／10)

（２）評価規準

① 関心･意欲･態度　　② 思考･判断･表現　　③ 技能　　④ 知識･理解

5　本時の計画

（１）　目標　品質管理とは何か理解する。

（2）　授業展開計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	・本時の目標、流れについてスライドを見る。	・プロジェクターを用いるので、照明や明るさなどの細かい所を確認する。	
展開 40分	・スライドを見ながらプリントに記入する。	・品質管理の必要性を説明する。 ・品質の定義について説明する。 ・品質管理活動に関する基本について説明する。 ・職場で行う品質管理の基本について説明する。 ・QC 検定について紹介し、例題を解く。	
整理 5分	・品質管理について理解できたか、ワークシートに自己評価をする。	・理解できなかった生徒がいた場合、どこが分からなかったのかをまとめ、次回に説明をする。	・④本時の目標を理解した。（観察）

（3）　評価の観点

①関心・意欲・態度　　②思考・判断・表現　　③技能　　④知識・理解

令和元年度　校内研究授業

研究協議会記録（設備システム科）

◎日　時　　令和元年１１月１９日（火）　６校時
◎科　目　　衛生・防災設備　（設備システム科２年）
◎授業者　　佐々木康宏
◎司　会　　半澤一哉
◎記　録　　保坂 悟
◎参観者　　今川　拡、船木和則、永井しおり、菅原　徹、長谷部正則、藤原宗一、保坂　悟、
　　半澤一哉、天野良智、虻川慶春、大嶋　学、近藤建悦
◎協議会

１　授業者から

準備時間が不足し、目的など自分の中で整理がつかないまま授業をしてしまった。指導案も内容がなく、探り探りであった。がんばった点はスライドの作製くらいで、学びに向かう姿勢を育む授業ではなく、一方的な講義型になってしまったことなど反省点が多かった。

２　参観者の感想等

藤原　宗一：教科書と授業内容がどのようにリンクしているのか、よく分からなかった。
授 業 者　：最終的に QC 検定につながるような授業展開を試みた。
天野　良智：生産管理と品質管理が混同しているようである。
藤原　宗一：マック（ハンバーグ）を例にあげたが、設備システム科のバルブなどの製品の方が良かったのではないか。
永井しおり：昨年教科担任であったが、教師の呼びかけに答えようとはするものの、発問に留意しないと脱線してしまう。生徒を参加させるためにプロジェクターやプリントなど配慮が感じられた。プリントに番号をつけ、生徒が取り組みやすいように管理している。
菅原　　徹：座学では生徒の言葉のレベルが低いので、品質とか管理など語句の説明をしてやらないと理解に苦労する。ひとつひとつの言語の定着が必要ではないか。
半澤　一哉：品質管理は広義、狭義での捉え方があり扱いづらい問題に取り組んだと思う。
QC 検定は様々な職業に関連しているので、キャリア教育的な視点から良かった。
長谷部正則：工場のラインで製造するような製品の方が授業展開しやすかったのではないか。
また、フィードバックなどカタカナの言葉についても手当が必要であった。
虻川　慶春：機械科３年の機械工作の授業で全く同じ内容を指導しているので、大変参考になった。
保坂　　悟：スクリーンが見やすいように机の配置を変えてやった方が良い。また、生徒は特に指示しなくともスクリーンをみてプリントに記入していた。その都度プリントを提出させ確認（評価）してみてはどうか。

令和元年度　中堅教諭等資質向上研修報告

教諭　渡部　祐司

校　内　研　修

実施月日（曜日）		研修内容	研修時間	研修指導者
6	6（木）	校内研修の進め方	2	研修部主任
	13（木）	中堅教諭等資質向上研修の必要性と教員のあり方	2	校長
	20（木）	特定課題研究の進め方	2	研修部主任
7	11（木）	センター研修Ｂ講座参加	6	主催者
	12（金）	センター研修Ｂ講座参加	6	主催者
	18（木）	服務と法規、学校の危機管理	2	教頭
	22（月）	学年経営と学級経営のあり方	2	2年部主任
8	29（木）	教材研究と指導案の作成（1）	2	教頭
9	3（火）	授業参観と助言（1）	2	校長
	3（火）	教材研究と指導案の作成（2）	2	保健体育科主任
	5（木）	授業実践に基づく授業研究（1）	2	校長
	12（木）	授業実践に基づく授業研究（2）	2	教務主任
	30（月）	選択研修のまとめ	2	校長
10	3（木）	問題行動に対する指導のあり方	1	生徒指導主事
	7（月）	ホームルーム経営案に基づく経営の改善	2	教頭
	10（木）	生徒会活動のあり方と問題点	2	特別活動主任
11	7（木）	教材研究と指導案の作成（3）	2	教頭
	14（木）	教育相談の事例研究	2	教育相談部主任
	19（火）	授業実践に基づく授業研究（3）	2	保健体育科主任
	19（火）	授業参観と助言（2）	2	研修主任
1	27（月）	進路指導の事例研究	2	進路指導主事
2	5（水）	特定課題研究の成果と課題	2	校長

選　択　研　修　計　画　書

研修教員名	渡部　祐司	所属校	男鹿工業高等学校	連絡先	TEL:0185-35-3111
		校長名	今川　拡		FAX:0185-35-3113

【社会体験研修先等について】

学びたいこと	サービス業という、様々なお客さんと接する機会が多い業種を体験することで、教育者としての視野を広げるとともに、教育現場における職務を遂行する上で必要とされる、資質の向上を目指す。		
研　修　先	かがちゅうスポーツ	所　在　地	〒 015-0078 由利本荘市谷地町１０８ TEL:0184-22-8585 FAX:0184-24-3805
依頼状（礼状） 送付先	〒 015-0078 送付先由利本荘市谷地町１０８ 代表者　職・氏名　　代表取締役　　加賀　孝司		
研修担当者名	加賀　潤	部・課名	

研修の期日・内容月日		
月日　（曜）	研修時間	主　な　研　修　内　容
＜第１日＞ ８月５日 （月）	9：00 ～ 12：00 12：00 ～ 13：00 13：00 ～ 17：30	店舗で営業等 休憩 取引先への営業（外回り）等
＜第２日＞ ８月６日 （火）	9：00 ～ 12：00 12：00 ～ 13：00 13：00 ～ 17：30	店舗で営業等 休憩 取引先への営業（外回り）等
＜第３日＞ ８月７日 （水）	9：00 ～ 12：00 12：00 ～ 13：00 13：00 ～ 17：30	店舗で営業等 休憩 取引先への営業（外回り）等

選　択　研　修　報　告　書

所　属　校	男鹿工業高等学校	職・氏名	教諭　　渡　部　祐　司
研　修　先	かがちゅうスポーツ		
研 修 期 間	令和元年　８月　５日（月）　～　令和元年　８月　７日（水）		

1　研修の概要

第１日＜８月５日（月）＞

・朝の打ち合わせ、店舗の清掃

その日の営業回りについての確認を行い、効率よく行動するために打ち合わせを行った。また、挨拶練習や清掃を丹念に行うことで、お客さんが来店された際、気持ちよく買い物をしていただくために大変重要なことである。これらのことは、学校現場においてもあてはまることである。

・営業回り

実際に、社員とともに商品の届けなどを行った。何よりも大事なことは、「お客様の要求に確実に応えられているか」ということである。間違った商品を届けてしまったり、届けなければいけない商品を忘れないようにメモすることは当然で、出発前にもう一度確認することが大事である。
また、お客様とのコミュニケーションも重要であると感じた。これも、生徒や保護者との接し方に通じる大切なことである。

・店舗でのサービス

お店に立って、来店されたお客様の対応や電話での注文等の対応を行った。電話注文では確実に注文内容を把握し、間違えて発注しないこと（品数や色など）が求められる。複数回確認することがお互いにとっても大切なことである。また、注文されたものが無い場合に他社に似た商品があるなどの提案を出来ることがより良い営業につながると指導していただいた。たくさんの商品を覚えておくことが重要である。

・商品の確認

各メーカーから届いた商品を注文票と照らし合わせながら、個数やカラーの確認を行った。確実に行うことが重要である

第２日＜８月６日（火）＞

・朝の打ち合わせ、店舗の清掃

・営業回り

・店舗でのサービス

第３日＜８月７日（水）＞

・朝の打ち合わせ、店舗の清掃

・営業回り

・店舗でのサービス

・商品の確認

２　研修の成果（今後への生かし方も含むこと）

普段何気なく利用しているスポーツ店であるが、その裏では我々には見えない大事な仕事があることを理解することが出来た。また、それらの多くが全く畑違いではあるが、我々教員の仕事にも多く通じるものがあり、とても勉強になった３日間でした。

この研修で学んだことをこれからの教員生活に生かしていきたいと思います。

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所　属　校	秋田県立男鹿工業高等学校	職・氏名	教諭　　渡　部　祐　司
研 究 分 野	A 教科指導　B 学級・学年・学校経営　C 生徒指導 D 進路指導　E 特別活動に係る指導　F 総合的な学習の時間に係る指導 G 特別支援教育に係る指導　(H その他)		
研 究 テ ー マ	フィジカル（ウェイト）トレーニングの効果について		

１　研究の概要

本研究では、１０月の高校サッカー選手権大会県予選終了後から、１，２年生による新チームへと移行したことを機にサッカーの技術面だけでなく、フィジカル（身体）面についても強化していこうと考え今回のテーマとした。現代スポーツは、選手のアスリート化が進み、種目の技術面だけでなく、フィジカル・食事・睡眠・メンタルなどの多方面にわたっての強化が進んでいる。そのため本校では全てを行うことは難しいので、フィジカル面に特化して行うことにした。

最終的には、選手自らが自分のコンディションの状態に気づき、食事も含めて日常的に自己管理ができる自立した選手を育成したいと考えている。

２　成果と課題

○トレーニングに入る前にアンケートを行い、生徒の意識調査を行った。（部員数１９名）

【質問１】　ウェイトトレーニングに興味がある。

１、ある（１０人）　２、少しある（５人）　３、あまりない（４人）　４、ない

【質問２】　ウェイトトレーニングの方法を知っている。

１、知っている（５人）　２、少し知っている（７人）

３、あまり知らない（６人）　４、知らない（１人）

【質問３】　ウェイトトレーニングはサッカーのパフォーマンスに影響があると思う。

１、思う（６人）　２、少し思う（３人）

３、あまり思わない（７人）　４、思わない（３人）

【質問４】　今まで、個人的にウェイトトレーニングを行っていた。

１、やっている（１人）　２、たまにする（５人）　３、全くしない（１３人）

【質問５】　今までに、練習や試合でウェイトトレーニングの必要性を感じたことがある。

１、ある（７人）　２、少しある（７人）　３、ない（５人）

アンケートの結果は以上の通りであった。

（Ａ４判１～２枚程度、研究にかかわる資料等があれば添付すること）

今回、ウェイトトレーニングを取り入れるに当たって、私自身も理解不足、知識不足な面が大きいと感じたので、パーソナルジムを経営しているトレーナーに月１回指導してもらうことにした。トレーナー自身もサッカー経験者ということでサッカーの動きに必要な筋力のアップを主目的にメニューを組み立てて頂いた。月１回の指導では、主に「スクワット」のフォームチェックと身につけた筋力を速い動きに対応するためのボールを使ったランメニューの２本立てで組み立てた。

【ウェイトメニュー】

・スクワット（１０回×５セット）
・オーバーヘッドランジウォーク（１０歩×５セット）
・バックランジ＋ MB（左右１０回×５セット）
・サイドランジ＋ MB（左右１０回×５セット）
・スプリットジャンプ＋ MB（左右１０回×５セット）　　※ MB・・・メディシンボール

○トレーニングを始めてから２ヶ月後に再びアンケートを行った。

【質問１】　ウェイトトレーニングを始めてから、サッカーのパフォーマンスに良い影響があったと感じる。
１、ある（８人）　２、少しある（７人）　３、あまりない（４人）　４、ない

【質問２】　ウェイトトレーニングを始めてから、食事量が増えた。
１、増えた（６人）　２、少し増えた（８人）　３、変わらない（５人）　４、減った

【質問３】　ウェイトトレーニングはサッカーのパフォーマンスに影響があると思う。
１、思う（９人）　２、少し思う（７人）　３、あまり思わない（３人）　４、思わない

アンケートの結果からも、ウェイトトレーニングを生徒も前向きにとらえていることが分かった。また、指導を通して、生徒達がお互いにフォームをチェックし合うなどの光景も見られるようになってきた。さらに、トレーニング後すぐにおにぎりなどの補食を摂取する習慣が身に付いてきた。その結果、トレーニングを始めた１１月には生徒１９名の平均体重が６２，８㎏であったのが、１月中旬には６５，３㎏まで増えてきた。

２月２日のトレーニング後にトレーナーと話した際には、「生徒は真面目によくやっている。少しずつスクワットの重さを増やしていて、向上心が見える。この調子でやってほしい。」との言葉を頂いた。キャプテンを中心に頑張って取り組んでいる姿が見られている。

今後の課題としては、このトレーニングをいかにサッカーに活かしていくかということである。生徒には、「ウェイトトレーニングをしたからといって、サッカーが上手くなるわけではないが、ベースとなる体力的なアップには間違いなくつながっているので良い意味で自信を持って取り組もう。」と話している。今回の取り組みをこれで終わらせるのではなく、継続していきながら、トレーニングの内容や質をブラッシュアップさせていきたい。

令和元年度全国設備工業教育研究会第55回秋田大会報告

設備システム科主任　保坂　悟

1　概要

(1) 目的

高等学校教育における設備工業関連教育の研究協議を通して、会員の資質向上と設備関連教育の充実発展を図る。

(2) 開催期日

令和元年７月３０日（火）～ ３１日（水）

(3) 開催場所

秋田ビューホテル ４階

(4) 参加者

会員 ２８名　　協賛会員 １２名　　来賓 １３名　　合計 ５３名

2　内容

【１日目】

(1) 会計監査

(2) 役員会・地区別協議会

(3) 開会式

(4) 教育講演会

演題　「高等学校学習指導要領　教科「工業科」の円滑な実施に向けて」

講師　文部科学省初等中等教育局参事官(高等学校担当)付産業教育振興室

教科調査官　　持田　雄一　様

(5) 協賛会員によるプレゼン

(株)富士通四国インフォテック　東京ビジネスサービス(株)　(株)西原衛生工業所

西原工事(株)　(株)小池設備　東武ビルマネジメント(株)　(学)中央工学校

【２日目】

(1)総会

①平成３０年度　事業報告

②平成３０年度　決算・監査報告

③令和元年度　事業計画

④令和元年度　予算

⑤令和元年度　全国設備工業教育研究会役員

⑥令和元年度　特別会員推薦について

⑦第３４回　空気調和・衛生工学振興会「高校教育賞」表彰について

⑧令和元年度　研究発表審査委員について

(2)報告

①大会日程について

②高等学校工業基礎学力テストについて

③令和２年度全国設備工業教育研究会開催について

④２級管工事施工管理技術検定学科試験について

(3)教員研究発表

①「マイコンカー製作の取組」

～ものづくりの基礎・基本の習得～

秋田県立男鹿工業高等学校　天野　良智

②「小川工業高等学校設備工業科の取組」

～資格取得の取組と今後の方向性～

熊本県立小川工業高等学校　井芹　禎宏

③工業基礎学力テスト作成状況報告並びに衛生・防災設備指導書について

大阪府立布施工科高等学校　小倉　一浩

④地中熱を利用した融雪研究への取組

青森県立むつ工業高等学校　畑中　次夫

(4)質疑応答

(5)講評　　秋田県教育庁高校教育課

指導主事　根守　潤　様

(6)閉会式

(7)教育視察

秋田市民俗芸能伝承館

３ 大会を終えて

会員校は全国で２４校であるが、この研究大会は設備工業教育の情報共有や研修のための貴重な機会となった。本校が大会事務局を担当するのは、昭和５８年の第１９回大会以来であったが、秋田県教育委員会、工業部会、設備関係諸団体等の後援を頂き、成功裡に終えることが出来た。ここに、関係各位に深く感謝申し上げます。

編 集 後 記

研究紀要２４号の発行にあたり、ご多忙中ながらご寄稿いただいた先生方に厚く御礼申しあげます。

今年度の研究授業では「学びに向かう姿勢を育む授業づくり」というテーマのもと、生徒たちの学びに向かう主体的な姿勢に重点を置いた授業を目指しました。様々な取り組みがなされ、教科間のよき刺激になれば幸いです。

この紀要で今年度の本校の教育活動を振り返りつつ、次年度の研究がさらなるものであるように祈念いたします。

（研修部）

令和元年度

研　究　紀　要

第２４号

発行日　令和２年３月３１日

発行者　秋田県立男鹿工業高等学校

〒010 － 0341

男鹿市船越字内子１－１

TEL　０１８５－３５－３１１１

Fax　０１８５－３５－３１１３

http://www.ogakogyou-h.akita-pref.ed.jp/